

「明日のことは分らないのだから」  
ヤコブの手紙 4 章 11-17 節

今日の箇所ではヤコブは「主の前にへりくだりなさい」という関連の中で、悪口の問題を取り上げています。兄弟たちへの悪口や裁きは、謙遜とは真逆の高慢の表われであるということです。なぜなら、私たちが人の悪口を言ったり裁く時、自分の考えや判断がいつの間にか基準となって、その基準に合わないものを見下したり退けたりするからです。

また、ヤコブは「兄弟の悪口を言ったり、自分の兄弟を裁いたりする者は、律法の悪口を言い、律法を裁くこととなります」とも言います。律法を裁くとは、その律法が従うに値するかどうかを判断するということです。律法とは神さまが定められた戒めです。その律法を無視することは神を無視することになる、これは神の上に自分を置く高慢以外の何物でもない、そうヤコブは指摘するのです。ですから、私たちが兄弟の悪口を言ったり、裁いたりすることは、「神の敵」の位置に自分の身を置くことになるのです。

次にヤコブは、「誇り高ぶる」ことを戒めています。ここで戒められている誇り高ぶりとは、神さまを抜きにして物事を計画し、そのとおりになると考えることです。ヤコブは 13 節でこう言います。「よく聞きなさい。『今日か明日、これこれの町へ行って一年間滞在し、商売をして金もうけをしよう』と言う人たち、あなたがたには自分の命がどうなるか、明日のことは分らないのです。あなたがたは、わずかの間現れて、やがて消えて行く霧にすぎません」と。

この人たちは、自分が一年先も生きていることを前提にしています。しかし、実際、彼らは自分の命がどうなるか、明日のことも分らないのです。人間は誰しも、わずかの間現れて、やがて消えて行く霧のような存在です。これとよく似たたとえ話をイエス様もされたことがあります。ルカによる福音書 12 章 16 節以下です。イエスさまはこのたとえを通して、地上のいのちに限りがああることを知りながら、それを忘れ、自分の蓄えたもので将来が保障されると考える愚かさを指摘しています。

この人たちの根底には、自分が自分の主人となって、自分の現在も将来も、自分の力で支配し、制御できるという考えがあります。しかし、「あなたがたは、わずかの間現れて、やがて消えていく霧にすぎません」と言われているように、私たちは、自分の命がどうなるのか、明日のことも分らないのです。そのことを忘れ、自分ですべてを支配できるかのように考えている者たちの愚かさ、高慢さをヤコブは戒めるのです。

それゆえ、ヤコブは私たちに向けてこう勧めます。「むしろ、あなたがたは、『主の御心であれば、生き永らえて、あのことやこのことをしよう』と言うべきです」と。

このことは、究極的には、人の命の長さも、事の成り行きも、神さまがお決めになるのだ、という主なる神さまへの絶対的な信頼の中で生きる姿勢を示しています。けれども、それは他人任せの無責任な生き方ではありません。人間としてのなすべき最

大の努力、最善、誠実の限りを尽くしはするが、でも、それですべてが決まるのではなくて、最終的には神の御手がすべてを導いてくださる、そのことを信じて神の御心にすべてをゆだねようとする姿。それこそが「主の御心であれば、生き永らえて、あのことやこのことをしよう」ということではないでしょうか。

私の生き方、私の考え方や見通しに過ちがあるならば、それも神さまが正してくださる。人間的に見て失敗に映ることがあったとしても、神さまがそれをなされるのならば、それは御心であると受け止めよう。そういう在り方がここで語られています。

エレミヤ書 29 章 11 節にはこう記されています。「わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。」

私たちには、明日のことは分かりません。けれども、神さまが私たちに将来と希望を与えると約束してくださっています。その神さまの御心を信じて謙遜に生きる生き方へと神さまは招いてくださっています。その神さまの招きに応えて、御心を求めて行こうとする生き方が、ヤコブの言う「人がなすべき善」であり、そこに平安が与えられるのではないかと思うのです。